おれたち演劇部！

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おれたち演劇部！

【Ｎコード】
Ｎ８０４１Ｙ

【作者名】
柊

【あらすじ】
演劇しない演劇部がめずらしく演劇しようとする話その一

お待たせしました演劇部！

どうもいきなりですが演劇部です。
いつもの現状確認タイムスタート
部室の扉をあける→中に入る→もう板倉と部長がいて、遅いと怒られた→なんと入部してから2週間初めての真面目な部活とな！（部長がいきなり言いだした）↑今ここ
ただ今ＯＮ　ＴＨＥ　イス
今日はイスを横一列に並べ、部室に置いてあるホワイトボードとその前に立ち説明をしようとする部長に向けられていた。
「一体何をするんですか部長！」
思わず興奮してしまう俺
「それを今からいうって言ってんでしょうが！」
部長に怒られてしまった
「まったくほんとだよ、それに興奮してると顔が気持ちわｒゲフンゲフン」
せきが明らかにわざとだったよ、ムカつくのがわかってやってるのであえてのスルー
「それじゃあ説明するけど今日はちょっとしたオリジナルの物語の台本を作ってもらうわ」
「それって結構難しくないですか？」
うんうんそうだと思う
「確かに…」
あ、板倉の声初めて聞いた気がする。（ちなみにずっとゲームやってた）
「別に今すぐってわけじゃなくってね、一週間ぐらいかけてじっくり作ってもらってもかまわないしそれはどうでもいいけどこっからが詳しい条件ね、その一　必ず面白おかしいハッピーエンドにすること、例えば何かをモデルにしたとしてシェイクスピアの四大悲劇

でもね、その二　必ず役の数は五人にすること、これは一番優秀だった作品はみんなで演じるからね、期限は一週間以内なにか文句あるでもある？」
なるほど、なんか行けそうな気がしてきたぞ。
「すいません、あまり関係はないのですがなぜ今になってなのでしょうか」
「まぁそれもごもっともよね、じつはね」
おお！一体どんな秘密が隠れているのだろうか！
「それは……」
いやがおうにも皆は期待し、緊張感が高まる中に出た答えとは！
「何となくよ」
シーンとした空気。
「ええー！」
あまりの驚きに席を立った俺
「な、なるほど」
実は納得してなさげな颯太
「この引きでそれはないわー」
まさかのことに思わず突っ込みを入れる鬼頭
「…（ちょっと引きぎみ）」
ちょっと引いた板倉も合わせてそうずっこけだった。
「なんかもっとこの二週間みんなの結束力を試していたのよ的なきれいな落ちはないんですか！」
うんうんとこの時ばかりはみんなの気持ちが一致した。
「私の気分と言い換えてもかまわないわ」
「こっちがかまうんですが…」
「あぁもう、うだうだうっさいわね、時間無くなっちゃたじゃないの！じゃあ宿題頑張ってね！」
まだ釈然としないんだがなぁ
「はい解散！」

お待たせしました演劇部！（後書き）

今日も頑張ってこー
お便り待ってまーす

頑張らＮＩＧＨＴ演劇部！！

どうもいきなりですが演劇部です。
夜の六時、今は自分の部屋で演劇部の宿題に悪戦苦闘中。
「おもしろおかしくハッピーエンドで役の数五人ねー」
やっぱり結構むずくない？
「あ、そうだ」
こんな時はみんなに相談だよね☆
「えーっとまずは誰からにしようかなーっと」
世間話に織り交ぜてメールでみんなに聞いてみた。
……二十分後……
結果発表タイム、パチパチパチ、という自演の後。
颯太＝もう出来たと言うのであらすじを送ってきたのだがくそ真面目な文学すぎて、これ条件に合ってないよ、と返しておいた。
板倉＝返信なし
鬼頭＝何を言ってもふざけた返信ばっかで、情報収集にかかったほとんどの時間をこいつに費やした（十五分近く）結果得られた情報はできてないということだけ。
俺＝何も得られてない
「何の意味もねぇ！」
一体俺は何をしていたというんだ、何の意味もないじゃないか。
「落ち着けもっとクールになれ俺！」
よし何とかなったぜ、これは自分の力ですべてを乗り越えろという神からの啓示のはずだ。
「そう考えるとすらすらと考えが思いつく！」
サラサラサラーっとな。
「何だこれは！自分で驚いてしまうほどの出来栄え！」
俺の才能よなぜもっと早く開花しなかったのだろうか。
「この喜び誰かに伝えずしておくべきか！」

ピポパピポパーってね。
「一体こんな時間に何用かしら？俵君、私す～っごく眠いんだよねー」
ちなみに今夜中の一時、ちょっと怒ってるのもそのせいだが俺としてはどうでもよく、この話を誰かに聞いてほしかったのである。
「部長！」
「ちょっといきなり大きな声出さないでよね！」
「あ、すいません。でもそんなこったどうだっていいんですよ部長！」
「私としてはそこそこ重要なんだけどな～」
小さい声でなんか言っているが聞こえなかったので無視。
「では本題に行きますよ部長！」
ペラペラペラーっとすでに作り上げた台本を説明までしてこの一大ストーリーの説明をした。
……四十分後……
「あぁーまぁだいたいわかったわよ」
「で、感想はどうですか」
「一言で言わせてもらうとね」
ドキドキ　ドキドキ
「没」
「なんでぇーー？！？！？！？！」
意味がわからないよ！
ちなみに俺の作った物語のあらすじとは。
まぁだいたいを簡単に説明させてもらうと、めちゃめちゃ壮大な西洋風のファンタジーな桃太郎だな。
ドラゴンとかを味方につけ、魔王軍と戦う！みたいな感じなんだが何がいけなかったのだろか？
「お、お願いします何がいけなかったのでしょうか」
ちょっと声が裏返ったが気にするな。
「全て何もかもが面白おかしくハッピーエンドっていみで私いった

つもりなんだけど」
「だからそうしましたけど？」
「はぁ～、あなたここまで言ってもわからないの？」
「はい、そうですけど？」
結果魔王軍に勝ちハッピーエンド、何処に不幸な人たちがいる？
「いるじゃないの、惨殺されまくってる不幸なのがたくさん！」
「は？」
おっと、俺としたことが敬語を忘れてしまったようだ。
「だーかーら！魔王軍よ　ま　お　う　ぐ　ん！日本語わかりますか？」
「えぇぇぇぇぇ！だ、だって魔王軍は悪であって退治されてこそのハッピーエンドじゃ…」
「その考えが甘いのよ、私が一年のころと一緒ね」
まず去年もそんなことやってたのかと。
「まったく、私のしていることも数少ない伝統なのよ。まぁそれはいいとして、例えばあなたが魔王…は言いすぎとして身近なところでイニシャルGになったと考えてみなさい」
「イ、イニシャルGに？」
「人が勇者、Gが魔物と考えてね、Gは生きるため仕方がないから人里にすむわ」
まぁ考えてみればそうだな。
「でね、家なんて概念はないんだからたまたま入ったところでいきなり殺虫剤かけられたりつぶされそうになったりとたまったもんじゃないわよ、人からすればGは倒すべきものなんでしょうけれどね」
「確かにそうですね…」
「でも魔物ならもうちょい頭もいいからここでは終わらないわ」
「それで町や村を襲うんですね…」
「そうよ、あなただって何かやられたらやり返したくなるでしょ、その積み重ねで悪と認識されて倒されたとしたらどうなる？」
「それはハッピーエンドではなくなると思います」

「そういうことよ」
「なるほど」
最初は納得なんてとても出来なかったがよくよく言われてみれば納得のいくことだ。
「あぁぁぁぁぁ！」
「何ですかうるさいですよ部長！」
「もうこんな時間じゃないの！早く寝なきゃこのバカ！」
いつのまにかもう三時だった。
「じゃあもう切るわよ！」
「待ってください次の作品へのヒントを何か！」
「もううっさいわね、はいじゃあね！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8041y/

おれたち演劇部！

2011年11月24日18時53分発行